

# 教える 伝える

## 避難所で立ち返った「看護の原点」



「物資が不足している現地に迷惑をかけないように、災害支援ナースは、自分の使うものはすべてリュックなどに詰めて自分で持っていきます。重いでしょう」  
(1月31日、京都市伏見区、京都市立醍醐中学校)

これから、東日本大震災から1カ月たった2011年4月、災害支援ナースとして宮城県石巻市の避難所に行き、その活動で体験したことを話します。一瞬のうちにすべてを失い不自由な生活を強いられた被災者の様子やそこで、私たちがどんなことをしたのか。それをスライドも使って紹介しますが、今まで享受していた豊かで便利な生活を失った時、自分たちは、一体どうするかを考え、また、看護師はどんなことをするのか知ってもらう機会になればいいと思います。

東日本大震災は、みなさんの記憶にも新しいと思います。実にマグニチュード9の大地震に大津波、それに原発事故という三つが複合的に起こった大規模な災害でした。私は、日本看護協会の研修や訓練を受けた災害支援ナースに登録していました。それで、病院から休みをもらい、11年の4月13日から16日までの4日間、宮城県石巻市の渡波小学校の避難所に行き支援活動

12日早朝に京都をたち、朝9時に、東京の看護協会に。それから、いろんな準備をし、午後10時にバスで現地向け出発しました。映っているのは、その時の私。どうですか、すごい格好でしょう。大きなリュックを背負い、キャスター付きのキャリアーで4日分の10リットルの水を運びます。現地は物資が不足しているのです。自分の水、食料、身の回りのものすべてを自分で持っていくのです。

13日午前9時に石巻に到着し、そのまま活動開始。バスでは眠れないままでしたが、今映っているように車窓から見る石巻は、至る所がけがれが無造作に積み上げられ、被害の大きさが迫ってきます。ねむいどころではありません。これ、体育館の被災者の様子です。この避難所は、震

# リファが やってきた!

震災の混沌に看護師の原点を見た。リファがやってきた! 第3回は、東日本大震災の1カ月後、現地避難所に入り「支援ナース」として活動した洛和会音羽病院看護部長の越後和代さんが京都市立醍醐中学校を訪問。1年生94人に、普段の暮らしからは想像できない被災者の不自由な生活や話の脱落としまでする看護の現場を語る。災害で一瞬に起こる日常の崩壊。一体、どう対応する。生徒にリアルな問いが突きつけられる。

救急看護認定看護師 洛和会音羽病院看護部長

### 今週のせんせい



えちご・かずよ 富山県生まれ高校の養護教諭の勤めで、看護師を目指し京都へ。1985年、京都府立医科大学附属看護専門学校卒業。87年、洛和会ヘルスケアシステム入社。手術室、ICU、療養型病棟、救命救急センターなどを経て、2009年、洛和会音羽病院教育担当看護副部長、11年から現職。1992年、救急救命士、2007年、救急看護認定看護師、13年、認定看護管理者の各資格取得。看護協会の育成委員を務め、看護学校で後進の指導も。「災害時に看護師として何をやるのか。東北で自分が体験したことを伝えたい」と

越後 和代 さん 京都市立醍醐中学校



④がれきがいっぱい。こんなひどいことに...⑤先生もここに寝泊まりして活動しました⑥この体育館が避難所になったら、ぼくは何ができるだろうか、十分な対応が難しい。さつこにこうした看護師本来の仕事ばかりが、支援物資の整理整頓や今映っている泥にまみれた缶詰の山。これを水で洗って汚れを取り、食べられるよう準備するのも大切な役割でした。

### 行ってきました

京都市立醍醐中学校 1948年、醍醐小学校に開校。53年、現在地に。教育目標は「一人一人の個性を大切に、たくましく生きる力と豊かな心を育てる」。盲導犬1頭育成に必要な300万円を寄付するためのリサイクル活動「M.D.R.」を、全生徒、教職員で展開し、18年かけ昨秋に達成。生徒数259人、肥後広文校長。京都市伏見区醍醐岸上町21。

### せんせい 答えて

支援の時、何を 持って行った?

被災地に持って行ったものは、せんせい、現地のものは一切使ってはいけないので、自分が生きるのに必要なものすべてです。水も4日分10リットル持って行きました。これ、重かったです。

せんせい、東北の震災の時も、奪い合いはなく、日本人は世界中で賞賛されましたね。私が行った避難所も、最初は2千人いて、食料は500人分しかなかった。それでも、お年寄りや子どもに優先的に配るなど、譲り合いでトラブルはなかったと聞きました。

せんせい、何が不足していましたか。

せんせい、授業の中でもふれましたが、震災から1カ月もたっていたのに、おにぎりや缶詰しかないことに衝撃を受けました。特に、飲み物は水ばかり。コーヒートかの嗜好品がなく、野菜もほとんどありませんでした。

せんせい、津波でなくなった人がほとんどで、家の下敷きになった人が多かったです。がれき処理でけがしたという人が多かったです。埃による咳、インフルエンザもありましたね。

こうした避難所で暮らす人たちの健康を守るのが、私たち災害支援ナースの第一の任務です。朝6時に起き、各部屋や体育館を回り、被災者の健康をチェックし、これをお医者さんに報告します。トイレや蛇口が清潔か見たり、消毒するものも大事な仕事。もちろん、感染症や高血圧、腹痛、頭痛、便秘などいろいろな健康問題が起こり、急病人対応もしなければなりません。これが連日、昼夜を問わず続くのですが、最新の機器を完備した状態には程遠く、なかなか



### よく診て感じる 当たり前前の方が本当に大切

そして、越後さんは「避難所での活動を通じ、最新の機器や設備に頼るばかりでなく、人をよく診て、感じて看護に携わる大切さを痛感した」と言葉を紡ぐ。また、「こんなひどい状況の中でもへたれないたくましさを持ち、お互いが助け合える日本人のすばらしさもよくわかった」といい「もし、こうした災害が身近で起こった時は、みんなも自分のできることを通じ、周りの人たちを助けてほしい」と、授業を結ぶ。

(文・辻恒人、写真・船越正宏)

「看護の原点にもどれ、やっとほんとうに、ナイチンゲールの精神が理解できた」という気がしたのでした。

私たちが看護師は、看護専門学校でいやというほどナイチンゲールの「看護書」をたたきこまれます。その中に「看護とは新鮮な空気、陽光、清潔さ、静かさを適切に保ち、食事を適切に選択し管理すること」とある。日ごろの環境とかけ離れた避難所で活動してみても、私はこの「看護の原点にもどれ、やっとほんとうに、ナイチンゲールの精神が理解できた」という気がしたのでした。

### 授業を終えて

何でもあり便利で衛生的な今の暮らしからは想像できない非日常が、災害で突然やってくることを、被災地で実感しました。そして、思いやり、譲り合うことがどんなに大切かを身にしみて知ったのです。この体験を伝えたいと思いました。(越後和代)

次回は宇宙論、理論天文学の京都産業大学神山天文台専門員中道晶香さんが京都市立双ヶ丘中学校を訪れます。

京都新聞 検索 本ホームページでも動画を紹介しています。